

土から離れるな、 生きるために必要なことを忘れるな

石岡真由海 / いしおか・まゆみ
グラフィックデザイナー



日本が誇るスーパーコンピュータ「京」の計算速度は毎秒1京回。シミュレート11想定能力が劇的に向上し、今後は民間の使用で多くのムダが排除された効率よいモノづくりや予測医療が可能になるらしい。さて、我が家の米作りは今年で無農薬15年以上になる。たった3反の田んぼだが、無数の生き物が常に土をつくり、人間も米を口にするためにはまさに八十八の手間をかける。コンバインなら一人半日で終わる稲刈りも、我が家では家族で数日かかる。京の世界から見ればムダの権化だ。ムダにまみれて子どもたちは小さい頃から見よう見まねで働き、成長とともに自分の体を上手に操り、結果、仕事がかどり自信もつく。今では労働の大切な担い手だ。逆に私は体と相談しながら無理をしないようになってきたから可笑しいし、とどのつまり、ものごとの順序を噛みしめる。「食べるために仕事をし、得たお金で食べものを買う」のではなく、「作ったものを食べる」のだ。

ムダの集大成は超単純だ。クモやヘビが水田をそれは見事に音もなく泳ぎ、勝手に訪れては足で土をかき回し肥料を落としてくれる野ガモたちのおかげで雑草が生えにくいなど、誰が信じるだろうか。こういうことが民衆交易の先の彼の国でも見られるのだろうか、夏の草取り中には想像する。以前フイリピンの民衆指導者の一人に質問した。得たお金で子どもを進学させたい親がほとんどだが、本当にそれでよいのかと。貧困から抜け出すためだが、農村での知恵の伝承が減ってきていると答えられた。だから、民衆交易と同時に実施されている有機農業で自立を支える取り組みに信頼を感じる。そうでなければどこかの国のいつか来た道だ。

「ポコポコ」は「サンゴ礁の満潮」をイメージしています。潮が満ちていくにつれ、サンゴ礁のあちこちに「ポコ」(水たまり)が現れて、ポコポコ同士がつながり始め、いつのまにか一面海になるというイメージです。アジアの各地域で「ポコ」が生まれ、気がつけばつながっているような活動をしていきたいという思いがこめられています。

CONTENTS ■ HALINA 19 2013.02.01

02	Relay Essay ポコポコ⑩ 土から離れるな、 生きるために必要なことを忘れるな◎石岡真由海
03	【特集】現代畜産を検証する — どうすれば過剰と不足・肥満と飢餓が併存する食の構造を変えられるか 食糧問題解決の鍵は畜産問題にある◎大野和興 【レポート】アジアに広がる現代畜産 【レポート】もうひとつの畜産をめざして
8	【Topics】 日本の百姓メコンに行く—メコン河を下る4年間の旅◎近藤康男 パレスチナと東ティモールから“独立”について考える◎津高政志
10	【Column】 Kakao Kita カカオ民衆交易奮闘記① カカオを媒介にして踏み出した一歩◎津留歴史 マイストーリー in ジャパン⑦ 【ボスニア・ヘルツェゴビナ】スレーイマン・ブルキッチさん 微笑みの国から① 旅でもなく根を張るわけでもなく◎平河夏 アジア現代文学あれこれ① 『パンダ』◎宇戸清治
12	撮っておきアジア⑩ キルギス共和国、ビシュケク◎植田 暁
13	APLA生活⑩ チョコラ デパブア・コーヒー豆チョコレート◎義村浩司
14	【Voice from APLA partners】 【東ティモールより】循環型農業の実地研修がスタート!
15	事務局だより

表紙のことば

「あなたたちは自分の下着を壁に飾りますか？」
以前、マニラのNGOが主催した先住民族の権利を守る会議に特別ゲストとして招待されたイフガオ族の長老は静かに参加者に向かって語りはじめた。本号の表紙はその会場で展示されたイフガオ族伝統の織物で、何千年の間、男性たちの「ふんどし」として使用されてきたものだった。英語でGストリングスとよばれるこの織物は、スペイン・米国の植民地時代以来、「未開の原住民」の象徴のように扱われ、観光客用の「見世物」にされてきた。「権利とは、生活・文化・歴史すべてを理解し尊重しあうことを前提にして語らなければならない」と長老は参加者に釘を刺した。であれば「あなたたちは下着を本の表紙に使いますか？」と、またお叱りを受けるに違いないが、「エキゾチック」に見える織物の一つ一つに、そこに生きる人びとの歴史と独自の文化が織り込まれていることを私たちも肝に銘じたい。(大橋成子)

特集 現代畜産を検証する

どうすれば過剰と不足・ 肥満と飢餓が併存する 食の構造を変えられるか

米国の干ばつに端を発した穀物価格の世界的高騰は一時、シカゴ先物相場でトウモロコシ、大豆の史上最高値を記録するまでになった。現在、相場は一段落しているものの、不安定さはぬぐえず、先行きは不透明だ。さらに長期的には世界の穀物需給は逼迫の度合いを高めている。穀物価格の上昇は全量を輸入に依存する飼料価格の高騰となって畜産農家を直撃する。同時に、肉や卵、乳製品を作るために大量の穀物を消費する構造が、今や10億人に迫ろうとしている世界の飢餓・栄養不足の人口を一層の飢えに追いやることも確実だ。大量生産・大量消費の近代システムが農業分野に最初に持ち込まれた畜産。安さだけを追求する仕組みとそれを支える技術がもたらす先にあるのは環境と食の安全の破壊と農家畜産の破たん。畜産物の生産と流通は一部の大企業に握られ、ベルトコンベアのように人びとの口に流し込まれる。過剰と不足、肥満と飢餓が併存する世界の構造を変える道はないのか。畜産の現場から考えた。(編集部)



狭いケージに閉じ込められたブタ。

食糧問題解決の鍵は 畜産問題にある

大野和興 / おおの・かずおき
農業ジャーナリスト、本誌編集長

映画『いのちの食べ方』

何年前か、食べものをテーマとする映画『いのちの食べ方』(原題: 『Our Daily Bread』)が評判を呼んだ

ことがある。セリフも音楽もない。画面には肉や卵や野菜が生産され、処理され、食べものになる映像が次々と流れる。そのすべてが無機

太陽も土も見えない、あるのは人工の照明と植物工場の中をぐるぐる巡る培養液という名の人為的につくられた液体だけ。工場労働者はいるが農民はいない。画面にはウシやブタやヒヨコも出てくるが、生きている動物とは思えない。上映した東京都内の劇場はどこも満員だったという。観客には若い人が目立ったという話も聞いた。聖

書に出てくる言葉で、「我々が日々の糧」と訳されている。作家の高橋源一郎さんは、この映画に寄せた解説文で、この言葉の後に日々の糧を与えてくれた神への感謝の言葉が続くと述べている。映画が描く「現代の食」への痛切な皮肉である。映画『いのちの食べ方』が描くウシやブタやニワトリはどのようにして出現したのか。現代畜産の歩みを、日本を例にみてい

工業型畜産の歩み

狭い畜舎に家畜を閉じ込め、高カロリー・高たんぱくの配合飼料を与え、より効率よく、より多く、畜産物の生産をめざす工業型畜産の歴史は、日本の場合、1960年代初頭から始まる。ハイライン、

大規模な畜産が進んだ北海道の牧場。



デカルブ、シェーパー。いずれも採卵鶏の品種名である。豚であればランドレースがよく知られている。米国で作出された品種で、穀物で効率よく卵や肉を生産する近代畜産といわれるものだ。60年代はじめ、農業基本法が成立して日本の農業が近代化の歩みを始めると同時に、輸入飼料穀物とセツトで入ってきた。当時

「青い目のニワトリがやってきた」と騒がれた。それまでの日本の畜産は、庭先養鶏、庭先養豚といわれ、酪農では数頭からせいぜい20頭、ウシは役牛として耕運用に各農家で1頭飼われているという規模であった。米国から入ってきた大量の飼料穀物と近代畜産は、畜産に革命をもたらした。これからは食生活が変わり、たんぱく質や脂肪を多く摂取する時代になる、畜産は前途有望だという政府の説得を受けて近代畜産を志した農民は、政府

の補助金と融資で近代的な畜舎を建て、飼料穀物と畜種を一手に握る大手商社とその傘下の飼料会社との契約に踏み切った。頭羽数は採卵鶏で数千から数万羽、豚では年間出荷頭数が数千頭というのが当たり前になった。庭先畜産の時代は、餌は自分の田んぼで取れる米や麦ぬか、くず野菜、作物の茎や葉、残飯などで事足りていた。

しかし大規模化した畜産では、餌は輸入穀物を配合した飼料を購入しなければならなくなった。動物は毎日食べるから、畜産農家は毎日膨大な量の餌を購入して与えなければならぬ。飼料代は負債として積みあがっていった。それは農民が商社資本や流通資本に統合されていく始まりでもあった。畜産農民は一銭でも安く生産し、競争に勝ち抜こうと追い立てられた。当時これを「ゴールなき規模拡大競争」と呼んだ。コスト競争に負けた農民は淘汰され、借金を背負い夜逃げや自殺した農民は数えきれない。こうして大量生産・大量消費の農業の時代が幕を開く。大量生産のシステムに乗った肉、卵、乳製品は値段が下がり、高根の花だった畜産品が一般労働者世帯で



コンクリートの牛舎から外に出ることはない。

普通に食べられるようになった。自動車労働者が車を買う車の大量生産、フードシステムで新しい米国型資本主義を切り開いたのと同様の仕組みが農業に持ち込まれたのだ。国民が安い肉や卵を食べられるようになった半面、穀物自給率は急速に下がった。1960年に83%だったものが、70年には43%、そして現在は28%となっている。

近代化がもたらした世界の矛盾

近代畜産のもう一つの側面は環境と食の安全破壊と動物虐待である。ニワトリやブタは方向転換も

できない狭い檻(これをケージといっ)に閉じ込められ、ただ太るだけ、卵を産むだけの「機械」になった。映画『いのちの食べ方』の世界である。運動もできず高カロリーの餌を食べさせるから、病気が発生する。その予防のために餌に抗生物質を混ぜる。それでも屠場で解体すると内臓がドロドロになったブタが多くみられた。そしてグローバル化の時代、世界に大量密飼いの工場型畜産が広がるなかで、口蹄疫やトリ、ブタのインフルエンザなど家畜の感染症もまたグローバルに広がる。高カロリーの穀物を与え、身体

を動かすこともままならない狭いケージで大量密飼いする現代畜産は今3つの壁にぶつかる。恒常的な穀物不足による飼料の値上がり、グローバル化する家畜伝染病(口蹄疫、鳥インフルエンザ、牛海綿状脳症)の蔓延、そして貧困化の拡大による需要減と価格低落だ。家畜が大量に穀物を消費する一方で世界の飢餓・栄養不足人口は確実に増大している。人はそんなに大量に肉や卵や乳製品を食べる必要があるのか。肥満と飢餓、過剰と不足が同時に存在するシステムを暮らしの足元から変えることはできないのだろうか。■

アジアに広がる現代畜産

レポート Report

1960年代、日本に持ち込まれた工業型現代畜産は70年代に入って韓国に移入され、80年代にはタイで大きく展開する。そしてその流れは、今や新興経済国の仲間入り寸前となっているベトナム、カンボジアへと移っている。

昨年2月、カンボジアからベトナムへ流れる大河メコン河を船旅で下った。カンボジアの村で見た風景は、庭先や畑で自由に動きまわる地鶏とヒヨコたち、鼻で土を掘る地豚といった昔ながらのものだった。だが、将来の変貌を予感させる動きも確実に存在した。

開発される畜産物生産の構造

カンボジアの首都プノンペンの周辺には、開発中のもも含め工



カンボジアの農家の庭先でワラをはむ牛、その横でニワトリが遊んでいる。

業団地がいくつも展開しており、外国からの投資による工場がすでに動いていた。農産物関係で目についたのは韓国企業のキャッサバ原料のパイオエタノール工場、それに隣接する大型精米工場と製粉工場。そうした企業のひとつに日本の商社である双日株式会社と中国の新希望農牧集団有限公司の出資でつくられた配合飼料工場があり、すでに操業が始まっている。新希望集団は1982年に創業を開始した中国最大のアグリビジネス企業で、中国国内で飼料、畜産を主体とした農牧事業から食品、化学品、金融業、不動産開発事業まで幅広く展開、配合飼料の取扱量では中国第一位で10%のシェアを占めている大企業だ。家禽の処理羽数も中国で14%のシェアをもつ。プノンペン近郊の飼料工場は、

2011年から操業が開始されていた。当面の生産量は年間10万トン、将来は20万トンを計画しているという。原料のキャッサバ、トウモロコシなどは国産を使用、大豆粕、菜種粕などはベトナムの港を経由して入ってくる輸入原料を使っている。しかし、メインのトウモロコシは生産量が増えると輸

料作物を植える。その収穫物と稲ワラで飼える小頭数の酪農である。飼料のほとんどは自給でまかない、牛の糞尿は再び田んぼに返される。全国各地で多くの酪農家によって実践された。

山地酪農は里山と酪農を結びつけたものである。里山では牛の餌となる草を刈り、薪を取り、山菜を探しと、近くの人びとの共同利用地として暮らしのなかに溶け込んで利用されてきた。ヨーロッパのように広い放牧地を得られない日本の地形条件のなかで、酪農家はこの里山に目をつけ、牛を放した。各地の酪農家が試行錯誤を繰り返しながら、牛が喜んで食べる草を見つけて種を採取し、日本独自の牧草をつくりだしたりもした。

山国日本の広大な山と畜産を組み合わせたのが林間放牧や放牧養豚と呼ばれるものだ。安い外材の輸入で日本の山は荒れる一方だが、林業と畜産を組み合わせることで新しい方向が開ける可能性も出てきている。豚は元気よく大地を走り回り、土を食べ、牛は木の下で眠り、山草を食べる。牛が草やつるを食べるので林業家は下刈をする手間が省ける。「古刈り」



放牧されゆったりと歩く乳牛(茨城・前川牧場)。

という言葉があるほどだ。鎌の代わりに牛が舌で草を刈ってくれるという意味である。植林した幼木への被害も、樹高が1メートルを超えたとほとんどない。放牧された牛や豚は十分な運動ができるため健康そのもので、肉もおいしい。それはケージ飼いはなく土の上で育てる平飼いにも通じている。

食べる側に委ねられている

こうした技術はすべて農民が実践のなかでつくりあげてきたものであることに特徴がある。家畜にやさしく自然との共生では優れているが、効率面で劣り、その分生産コストが上がり値段が高い。そのため、輸入穀物で大量生産する大規模工業型畜産に負けて次第に衰退していった。こうした畜産を蘇らすには、生業として成り立つ支えが必要であることはいうまでもない。どうすればよいか。日ごろ食べる肉や卵の量を減らし、減らした分を上乗せして、値段は少し高いが、自然と共生する畜産物を買って食べることだ。ポールは食べる側にある。メタボが減って健康になり、国の医療費の引き下げにもつながるだろう。(大野和興)

カンボジアに進出した中国のアグリビジネス新希望の飼料工場。



入に切り替えざるを得なくなるだろうと思われる。双日は飼料生産・供給を軸に畜産物の生産から食品加工まで一貫した体制を作り上げた意向のようであった。

将来有望なマーケット・ベトナム

メコン河を下りベトナムに入ると、両岸に広がるのどかな田園風景は、いかにも経済成長の時代に入ったな、と思わせるものへと変わ

わっていった。ホーチミン市で双日と日本の配合飼料会社である協同飼料株式会社が設立した双日協同飼料会社を訪ねた。カンボジアでは中国企業と手を組んだ双日だが、ここでは日本の飼料会社と提携しているのである。同社はベトナムを将来の有望な市場と見ており、特に頭数で日本の3倍いるブタに注目しているという話だった。カンボジアと違って飼料原料はすべて輸入に頼っている。

市場としての成熟度は日本の60年代後半から70年代、タイの20年前くらいという見方を示してくれた。

これから有望なマーケットであるというのは世界共通の認識のようで、ベトナムには双日、協同飼料だけでなく世界の飼料資本・アグリビジネスがひしめき合っているようだった。飼料工場だけを見ても、世界最大の穀物商社カークル、タイの多国籍アグリビジネス企業C P、フランス

のプロコンボ、中国の新希望、韓国のC Jなどが勢ぞろいし、生産量も年20万トンの双日協同よりひとまわりもふたまわりも大きい規模を誇っている。

そのベトナムもまた、農村に入ると多くは庭先畜産の域を出てい

レポート Report

もうひとつの畜産をめざして

これまでみてきた工業型現代畜産を人にも自然にも、そして当事者である動物にもやさしい営みに変えるにはどうすればいいのか。それは、家畜と土とのつながりを取り戻すことに尽きる。すでに技術も方法論もできあがっている。有畜複合、水田酪農、山地酪農、放牧養豚、林間放牧、草地養鶏。

いずれも1950年代以来、農民と、農民とともに歩いた研究者が共同でつくりあげてきた農法であり土地利用形態だ。

有畜複合とは水田・畑と小規模畜産を組み合わせた、この列島の零細だが豊かな農業生産力をフルに発揮させる経営形態のことであ

ない。こうしたカンボジア、ベトナムの農家がたどる道が今から目に見えるようだ。多国籍アグリビジネスによって工業型の加工畜産に困り込まれ、多くの農家が淘汰されるという、日本がたどった道を歩み出している。(大野和興)

る。田んぼや畑からとれた作物のうち人間が食べられないものを家畜に与え、家畜の糞尿は田んぼと畑に返す。有機物の循環でも理想的な経営形態だ。糞尿からメタンガスを自給する農家もいた。しかし、この試みは60年代以降の経済成長に合わせ、国がすすめた農業近代化路線である農業の大規模化・効率化・モノカルチャー化のなかで消滅していった。

築き上げられた自然と畜産の共生

ヨーロッパの畑作やアルプスの山岳地形とセットで発展してきた酪農を、日本の農業のなかに根付かせようとする酪農家の苦闘から生まれたのが、水田酪農と山地酪農だ。水田酪農は稲作と酪農を有機的に結びつけた経営形態をいう。米を収穫した後の裏作・冬作に飼

日本の百姓メコンに行く —メコン河を下る4年間の旅

近藤康男／こんどうやすお
アジア農民交流センター

2008年3月を皮切りに2012年2月まで、日本の農家・農業関係者7〜8人で計4回、40数日に渡りメコン河流域を旅した。毎回、一日はメコン河を下り、それ以外は農村部を訪ね歩くという旅だ。足を踏み入れた国は、中国、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムの5カ国。雲南省で初めて船に乗った旅は、最後のメコンデルタで南シナ海の手前の立ち入り制限区域に辿り着き完了となった。



広がるゴム農園 (カンボジア)。

次世界大戦後の対米民族解放戦争、革命戦争・内戦等々。この地域の人びとはまさに激動の歴史と過酷な暮らしを経験し、それが現在にも影を落としている。

過酷な歴史に翻弄される 激動のインドシナの旅

現在、社会主義を標榜する国は数カ国しかないが、メコン河の流域には中国、ラオス、ベトナムと3カ国もある。少し遡ればカンボジア、ビルマが加わり、タイを除けばほとんどが現代の社会主義を経験した国々だ。

現在でも国境付近の少数民族の往来はあるが、古くはインドシナから中国南部への侵攻とその逆の侵攻、カンボジア、ベトナム、タイの間での支配・被支配の関係とそれに伴う人びとの大移動、第2

風景に出合うことになった。

メコン河を下る旅は ゴムを追っかける旅に

最初に中国雲南省で見た時にはそれほど迫力を感じなかったゴム林。雲南省は車の天然ゴム需要で一気にゴムへの転換が進み、2008年当時、すでに新たなゴム林の造成は禁止されていた。ところがそのゴムはその後、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナムと南下し、プランテーション型を含む大小のゴム園となった。そこには外国の資本投資以外に、国境の両側に住む同じ少数民族が地縁・血縁を使ってゴムを仲介し、貿易商人として跋扈し、国境地帯を中国色に染めている。少し内部に入ると、道路に沿って1キロ以上続くような農場も珍しくない。南に行くにつれて、ここ10年程度の間造成されたゴム園も見られる。農家が土地を提供して契約主体となっているものもあるが、巨大な農園の大半は、軍の高官か政府高官が政治力を使って買収あるいは長期賃借をし、海外の資本と契約するケースだ。ラオスとカンボジアで言えば北は中国、中部以南では東からはベトナム、西からはタイによる投資が圧倒的。ひどい場合は、権力を利用して森林を手に入れ、木を伐採して売り払い、現金を手にした後はほったらかしということもあるそうだ。

今は豊かなゴム農家もみられる。しかし、すでに最高値の国際相場は生計費の

生活臭のするメコン河が ベトナムに入ると産業道路に変貌

インドシナ半島ではタイは別格、それに続くのがベトナムだ。カンボジアのプノンペンで船に乗り、河の上で国境を越えてベトナムに入ると、川幅は広くなり、両岸に精米工場や製材所が立ち並び、荷揚げ設備が併設されている風景が増えてくる。往来する船も、川魚を漁る親子や家族の移動する子舟から貨物を積んだ大型船が目立つようになる。メコン河も生活道路から産業道路に変わる。

地図上でメコン河を南からプノンペンに向けて見ると、見事にプノンペンを要に扇状をしており、そこを縦横無尽に河川が行き来していることが分かる。インドシナ半島の輸送網は「東西回廊」と「南北回廊」の陸路がこれまで注目されてきたが、ベトナム、カンボジア、ミャンマーの経済特区・港湾をつなぐ水上交通も重要になるだろう。

たおやかな物腰そのものの雰囲気を持つラオス、過酷な内戦を生き延びたばかりのカンボジアが、周辺や海外の強国に蹂躪されはしないかと心配をしつづけたメコンの旅だった。

パレスチナと東ティモールから 独立について考える

津高政志／つだかまさし

特定非営利活動法人 日本国際ボランティアセンター(JVC)パレスチナ事業担当

2012年9月28日、東ティモール独立10周年記念連続講座「東ティモールの独立が私たちに問いかけるもの」の第3回に、話者として招かれた。最初この話をいただいたとき、「パレスチナとイスラエルのことしか話せませんが……」と躊躇したが、独立という切り口への興味や、主催者側の熱意もあり、引き受けることになった。講演の準備に当たり、主催者側と話し合いをしたり、関連文献を読んだりしたが、実は自らの世界を押し広げるいいきっかけとなった。講座当日は、パレスチナの現場で起こっていることを説明したうえで、主催メンバーとのクロストークという形式で、東ティモールとパレスチナの問題を対比しながら理解を深めた。

国家の魅力と実際

独立10周年を迎えた東ティモールと、未だ占領下にあるパレスチナ。大国に支えられた占領政策、水面下で活動する解放組織、乱立する派閥、さらに国連や海外NGOの存在、土地や宗教の問題、言語やアイデンティティーの問題など、似

て非なる経験をし、どちらも国際政治の力学の中で翻弄されてきたことは事実だ。パレスチナも東ティモールも、国家樹立のために多くの血を流しているが、人間を国家という枠組みに走らせるものは何だろう。それ以前に、「独立」は果たしてそこに生きる人びとにとって本当に魅力ある状態なのだろうか。

パレスチナはその点、現在進行形での問いに直面している。パレスチナは自治政府を持つものの、事実上の国家形成は現時点では実現できない。イスラエルは米国のサポートを受けながら、パレスチナの土地を奪う分離壁の正当化、占領地に自国民を移動させる入植、それに伴うパレスチナ人の家屋・施設の破壊、そして東エルサレム併合の既成事実化を進めている。国家の安全保障という名目ですべての人権侵害が懲罰なしにまかり通る状況だ。「せめて形だけでも……」とパレスチナ人たちがめざした「国家」という地位は、2012年11月29日、国連総会の場で獲得することができた。138カ国が賛成、9カ国が反対、41カ国が棄権。しかし、この国連決議は、パレス

チナを国連の加盟国にするものではなく、「オブザーバー機構」から「オブザーバー国家」へと格上げするもので、依然として国連での投票権はない。

一部熱狂するパレスチナ人の姿が報道されるも、国家承認という言葉に酔いしれる人たちは少ないそうだ。2年間現地に駐在した私には、この冷めた感情がなんとなく理解できる。11月29日の前も後も、分離壁はあり、入植地はあり、占領や封鎖は継続している。その状況が目に見える形で改善しない限りは、パレスチナの人たちは素直に喜ぶことはできないだろう。

「独りで立つ」ためには

そして、ようやく「形」ができてきたパレスチナ国家は、皮肉にも「形」を作ったことで逆に「中身」が伴わない可能性が高まってきている。例えば、国家承認以降、イスラエルはパレスチナのヨルダン川西岸地区を南北に分断する新たな入植地建設計画を発表した。この計画が実行された場合、パレスチナ国家は完全に機能不全に陥る。悲しきことに、「独りで立つ」という意味の独立が、独り立ちを阻むという奇異な状況を作り出す。

こういった理不尽がまかり通る状況が、国際的な司法権へのアクセス不全によるものであるという考え方もある。国家という形を得た現在、パレスチナは国際刑



エルサレム唯一の難民キャンプ(写真手前)を取り囲む分離壁。壁の反対側もパレスチナの土地だが、イスラエルが入植地建設を進め、併合が既成事実化されていく。

事裁判所をはじめとした国際司法機関に訴えることが現実的な道として見えてきている。

東ティモールやパレスチナを見つめながら感じるのは、国家の姿は様々で、どういった姿を理想とするかに関して、そこに生きる人びとのコンセンサスを取ることが独立するには極めて重要であるということだ。独立は実体が伴ってこそ、そして独立による恩恵がすべての人たちに享受されてこそ、輝きを放つものなのだと思ふ。

〔注〕東ティモール独立10周年の「お祝い」から一歩進み、日本に暮らす私たちが取り組むべき課題を見つける機会とするため、ビルマ、パレスチナ、インドネシア、ナカランドの現場に通うジャーナリストやNGOの方々を呼んで開催した連続講座「APLA事務局も主催者メンバーとして関わった」。

03

photo essay
from Thailand

微笑みの国から No.1

平河夏 / ひらかわ・なつ
一児の母、タイ・バンコク駐在3年目

旅でもなく根を張るわけでもなく

バブルが崩壊してから数年経った頃だったか、旅というものに強烈に惹かれた時期があった。そしてその旅とは、アジア各国を巡るものでなくてはならなかった。若さ故のモトリアム願望だったのだと今になっては思うが、人一倍小心で、寂しがりな私には実行不可能な夢もあった。そんな私が今バンコクで暮らしている。夫の海外赴任に就いて来ただけのいわばオマケなのだが、かつて訪れたいと夢見た国のひとつに暮らすということは、少なくとも心躍るものである。

これは旅ではない。れっきとした日常が在り、守るべきものもある——子どもを、時間を、日々の暮らしを私は守らなければならない。だが、ここに根を張ることもきつくない。そんな宙ぶらりんな状態で、私はこの国で何をを見たのか、また見ることができたのか。

ずっと、タイがなぜ『微笑みの国』と称されるのかを知りたかった。観光客誘致のための単なるキャッチコピーだと言ってしまうまでも、少なくとも今の日本にこのコピーは使えない。タイの『微笑み』とは何なのか。タイに暮らして3年目に入ろうとしている。そろそろその答えを見つけない。



チャオプラヤー川を運行する船で観光を楽しむ女性。

01



kakao kita

カカオ 民衆交易奮闘記

1

津留歴史 / つる・あきこ
オルター・トレード・インドネシア社現地駐在員



一つひとつ手作業でカカオの実を収穫する。

※「Kakao Kita」はインドネシア語で「私たちのカカオ」という意味です。

カカオを媒介にして踏み出した一歩

これから6回にわたって、インドネシア領パプアで始まったカカオ事業について連載します。

パプアは1969年インドネシアに併合され、その後米国の鉱山会社による銅と金の採掘を皮切りに森林伐採、パームヤシ農園、天然ガス開発などが進められています。近年はこの開発ブームに沸くパプアに仕事を求め流入する非パプア系人口が著しく増加し、都市部では先住民族を数で上回るようになりました。太古より自然と共生しながら狩猟、採集漁労、農耕を営んできたパプア人の伝統的社会はこの50〜60年の間に急速なスピードで変容を余儀なくされています。「人が土で家に踏み込んで、我々の財産(天然資源)を奪っていく」。パプアで進行中の開発

は、先住民族の人びとにとっては理不尽な収奪以外の何ものでもないのです。私は、このパプアに1995年から通いつづけ、1999年〜2003年は州都ジャヤプラにあるNGOに居候しながら、パプアの人びととどっぷり付き合い、インドネシアの中でパプア社会が直面する弾圧や差別や周縁化といった問題も肌で感じました。このように書く、パプアはいかにも暗い社会のように思うかもしれませんが、パプアを訪問した人は、その美しく雄大な自然に圧倒され、やさしい人びとに胸を熱くします。

02

マイストーリー ジャパン

日本に住む在日外国人たち 【第七回】



スレーイマンさん。東京町田にて。
東京スプリング: <http://tokyospring.blogspot.jp/>

「ポストヘルツェゴビチスレーイマン・ブルキッチさん」 / Biko Suljman
聞き手: 廣瀬康代 (Koyuki Hirose)

「東京スプリング」を主催され、来日してから22年のスレーイマンさんをご紹介します。「東京スプリング」とは月1回、タイムリーな話題のドキュメンタリー映画の上映や、ゲストスピーカーを招いて話を聞いたあとに、参加者がフリーディスカッションをするというイベントだ。

スレーイマンさんはフランス語講師。このインタビュをするまではフランス人だと思っていたが、実は旧ユーゴスラビア出身だった。ポスニアの話をもっと聞きたいという「何も話すことはないよ……」と躊躇しながらも、少話だけ話してくれ。旧ユーゴ時代は独裁主義だったので政治的自由はなかったが、人として生きていく基本的なものが守られていたという。医療・教育・明

日何を食べるかを心配しなくてよい。そこが好きた。でも、今は違っている。資本主義は本当に人間を幸せにするのか? 「自由」は食べられない、何のための「自由」なのか……。日本の文化にはパッションがない。日本人はもっと怒り、感情を出さない。我慢強すぎるから年間3万人も人が自殺するのだ。闘うことが大切! そして、日本の政治にストレスを感じるという。選挙に行かない若者も心配している。「色々日本を心配していたら髪の毛が白くなってしまった!」と。若者に希望がない、夢がない人が多いから日本は危ないと思う。しかし、選挙にいかない若者に憤慨しながらも、若者と話すことが好きらしい。「だからフランス語教師の仕事をしている」と。民主主義とは何か? メディアでは取り上げない。国民は騙されてはだめだ。日本もフランスもこの国も。自分たちで自由を取り戻すため、「東京スプリング」を開催する。人が集まるのが大切。行政が決めることを守るのではなく、人が集まって話して決めていくことが大切だと思っている。しかしその「東京スプリング」もなかなか人が集まらないことが悩みだそう。さまざまな話題を試行錯誤で企画されている。

04

アジア現代文学 Asian Contemporary Literature ARE-KORE | 01

『パンダ』

ブラーパダー・ユン(著) 宇戸清治(訳)、東京外国語大学出版会、2011年

宇戸清治 / うと・せいじ
東京外国語大学教授



タイの経済発展とポストモダン文学

「パンダ」というあだ名をもつ青年の額には怪しいテキモノがある。そのテキモノのなから現れたオレンジ色の物体は、青年の生まれ故郷の星と連絡を取り合うための通信器官だった。地球に生まれ落ちたのは間違っていたと悟った青年は、はたして自らの故郷の星に帰還できるのか。タイのポストモダン文学の旗手が放つ、真摯にして滑稽、ペーソスと現代文明批評に溢れた傑作長編である。

メナムデルタを縦横にめぐる運河で、「東洋のナポリ」とも呼ばれたタイは、今では世界中の自動車産業が集中し、8000社もの日本企業が展開する国として知られるまでに変わった。若者はSNSや日本のマンガに熱中し、主婦は韓流ドラマに夢中だ。フードコーナーは飽食する大衆で溢れている。こうした急激な経済発展と膨大な中産階級の誕生はタイ文学に地殻変動を促し、ブラーパダーのようなポストモダン系の作家を生み出すことになった。ブラーパダーは茶道や禅を学ぶため京都を訪れたり、浅田彰や中沢新一の思想に関心を寄せる一方、『方丈記』にも造詣が深い。最初の短編集『目の中の洪水』によって一躍カリスマ作家と呼ばれるようになった。これは一種の形而上小説で、東南アジア文学賞受賞作『存在のあり得た可能性』とともに、グローバルズムのなかで浮遊する故国喪失者ブラーパダーの姿が様々な形象をとって描かれている。ブラーパダーの短編集には確たるストーリーはない。ある出来事と別の現象との内在的な因果関係は曖昧で、無限の広がりをもつ出来事の連鎖があるだけである。数年前、日本で『地球で最後の二人』(浅野忠信主演、ベニス映画祭男優賞)というタイ映画が上映された。その原作者もブラーパダーである。映画では、地上に残った最後のヤモリを人類の奔放な自由の先に行き着いた孤独と自己消滅の象徴として登場させている。しかし、『パンダ』ではそうしたベシズムはむしろ再生への希望に転化しているように見える。

今回のお題

チョコラ デ パプア・ コーヒー豆チョコレート

レポーター
義村浩司 / よしむら・ひろし
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品開発担当



レポーター
義村浩司 / よしむら・ひろし
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品開発担当

レポーター
義村浩司 / よしむら・ひろし
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品開発担当

レポーター
義村浩司 / よしむら・ひろし
（株）オルター・トレード・ジャパン 商品開発担当

今 今回紹介するのは1月から
APLASHOPでも発売開
始した「チョコラデパプア」コー
ヒー豆チョコレート。ほのかな酸味
のあるパプア州産カカオと香り高く
コク深い東ティモールコーヒーが口
の中で程よく溶け合い絶妙な美味！
東ティモールとパプアが出会って

ふたつの民衆交易の産地が出会い、
生まれました。
パプア州の先住民族を中心とする
NGO「YPMDDIIパプア農村発展
財団」は、農村の人びとの自立した
経済・暮らしを実現するために、農
産物の共同出荷などの活動を実施し
てきました。農村の人びとにとって
カカオは主要な収入源ですが、その
ほとんどは生豆や半乾燥の原料とし
て付加価値の低い状態で地元の中買
人に買われていました。そのカカオ
を活用し、自らの手で加工し、事業
をすることにより自立を果たそうと
する試みを始めたのです。まず、Y
PMDでは2010年よりカカオ栽培
の改善と発酵・乾燥させた高品質
のカカオ豆の加工に取り組み始めま
した。

東ティモールのコーヒー出荷
独立から間もない東ティモールで、
民衆の融和と農村の持続的な暮らし
を夢に活動してきた若者たち。内紛
や住民間紛争の絶えないエルメラ県
の山間部の村々を訪れ、人びとの融
和と持続的な暮らしを呼びかけてい
た彼らに対して、村人たちは簡素な
ながらも温かい食事と寝る場所を提
供しその活動を支えていました。
その若者たちがATJと出会った
ことで、村びとたちの主要な現金収
入源であるコーヒー豆を加工して日
本へ輸出することを始めました。農
村の産物の共同出荷や必要物資の流

一粒一粒の味
同じような夢を持ち、試行錯誤を
繰り返しながらも挑戦を続ける東テ
ィモールとパプアの仲間たちがつく
ったコーヒーとカカオはどこか同じ
香りがします。このコーヒー豆チョコ
ラのおすすめの食べ方は、まずは封
を切ってカカオとコーヒーの香りを
楽しみ、一口で豆チョコをガリガリ
と味わい、最後の一粒は、口の中で
ゆっくりと溶かしてチョコレートを
味わい、次の中から顔を出したコー
ヒー豆をかじってみてください。



初めての共同作業に挑んだカカオ・チームの面々。



キルギス（現地語ではクルグスが近い）は、中央
アジアの天山山脈に位置する山岳国家で
す。かつては遊牧民が天山山脈の高低差
を利用して、巧みな遊牧を営んでいま
した。19世紀から1991年に独立するま
での間、ロシア帝国とソ連の一部とな
っていたときに、遊牧民の生活も変化
し定住がすすみました。しかし牧畜の
ノウハウや人びとのアイデンティティ
のなかには、確かに遊牧民を出自と
する伝統と誇りが生きています。



- 1 — 首都ビシュケクの中央広場にある
マナス王の像の向こうに天山山脈
を望む。英雄叙事詩マナスの主人公である彼は、民族の象徴です。
- 2 — 国際婦人デー（3月8日）の中央広場。多くの家族連れが広場を訪れ、立ち並ぶ特設の
セットの前で記念写真を撮っています。
- 3 — ビシュケクの映画館では、ロシア映画やハリウッド映画のロシア語吹き替えなどが
上映されていました。手前のテントは本の出店です。休日になると人の集まる場所
に本や文房具を売る出店が現れます。
- 4 — 2月末から3月前半でも雪が頻繁に降ります。歩道は毎朝アイスバーンと化すので、
転ばないように歩くだけでも一苦勞です。現地の人たちも転ばないように、お互い
手を繋いで歩いていました。
- 5 — ビシュケク中心部の喫茶店で食べた中央アジアの伝統料理プロフ。ニンジンや肉
を油で炊き込んだ炊き込みご飯の一種です。寒い日には温かいプロフが特に
おいしく感じます。
- 6 — これは1903年の史料で、左側がアラビア文字、右側がロシア語で書かれています。
現地の文書館には中央アジア社会とロシア帝国との関係を伝える貴重な史料が
取られています。

（2012年2月～3月撮影）

このコーナーでは皆さまの写真を募集しています。
募集内容○アジアを旅した写真5枚程度（日本も含まず）詳しくはAPLA事務局（TEL:03-5273-8160）までお問い合わせください。皆さまからの応募をお待ちしております！

編集後記

今号は世界的な食糧価格上昇とからめて畜産問題の特集した。おりしも安倍政権は金融の超緩和・インフレ増進と合わせ農業・医療・介護を柱にした成長戦略を打ち出した。農民畜産を蹴散らし、食の安全・環境を犠牲にして大企業による畜産支配を成し遂げた現代畜産こそが究極の農業成長戦略なのだという事を改めて強調したい。(大野)

リレーエッセイ・ポコポコを執筆くださった石岡さんは、APLA発行の『手わたしバナナくらぶニュース』の編集デザインを担当してくれている。いつもこちら側の意向を汲み取り、想像以上にびったりのイラストで仕上げて、なぜこんなに意思疎通ができるのか? と思っていたが、今回のエッセイを読んで納得。とても共感した。2013年始めにふさわしいエッセイではないかと思う。今号はコラムの新連載もスタート。ぜひご覧ください。(吉澤)

APLAでもオリブオイルを販売することでパレスチナの農民の平和への闘いを応援しており、現地の情勢にもアンテナを張るよう努めているが、正直なところなかなか追いついていない。そうしたなか、JVCの駐在として現地で生活をされていた津高さんのお話で、パレスチナを取り巻く状況について改めて整理ができ、自分なりに考えつづけるきっかけをいただいた。今回のTopicsで昨年の講座に参加できなかったみなさんにもその内容をお届けでき、うれしく思う。(野川)

ハリナ HALINA

2013年2月号 vol.02-no.19
2013年2月1日発行

編集長
大野和興

編集者
吉澤真満子、野川未央

表紙写真
長倉徳生

デザイン・制作
十年舎

編集・発行
特定非営利活動法人 APLA
(APLA/あぷら: Alternative Peoples' Linkage in Asia)
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
tel. 03-5273-8160
fax. 03-5273-8667
e-mail info@apla.jp
URL http://www.apla.jp

印刷
株式会社セイズ

事務局の動き(2012年11月～2013年1月)	
11月 2日	第3回チョコレート・サミットに野川が参加しました。
11月 3日	「ババアチョコレートの挑戦～現地パートナーを迎えて」をATJと共同で開催しました。
11月 5日	パルシステム埼玉「平和募金団体交流会」に赤石が参加しました。
11月 9日	二本松有機農業研究会を秋山、疋田、吉澤が訪問しました。
11月 16日～17日	第22回一般社団法人BMW技術全国交流会に吉澤が参加しました。
11月 21日	取材のため、福島県伊達市を吉澤が訪問しました。
11月 27日	フォーラム・アソシエ2012年度第2回登録講師交流会に野川が参加しました。
12月 2日	「福島百年未来塾第5回」を開催しました。同日に開催された二本松有機農業研究会の収穫祭に事務局も参加しました。
12月 5日～15日	東ティモールへ吉澤と野川が出張しました。
12月 16日	国際有機農業映画祭2012にブース出展しました。
12月 25日	長野県伊那市グリーンファームを吉澤と野川が訪問しました。2013年に東ティモールで実施予定のワークショップへの協力をお願いします。
12月 27日	BMW技術協会・若手幹事に吉澤が参加しました。
1月 8日	福島県南相馬市・原町聖愛保育園(バナナ募金支援先)を訪問し、バナナのワークショップを開催しました。秋山、理事の廣瀬、吉澤、赤石が訪問しました。聖セシリア女子短期大学の岩関淳子先生と学生の高橋良子さんにご協力頂きました。
1月 17日～27日	フィリピン・北部ルソンとネグロス島へ秋山、吉澤、赤石が出張しました。
1月 29日	「ホンモノの愛を伝える本当の手作りチョコレート・ワークショップ」を開催しました。

事務局からお知らせ

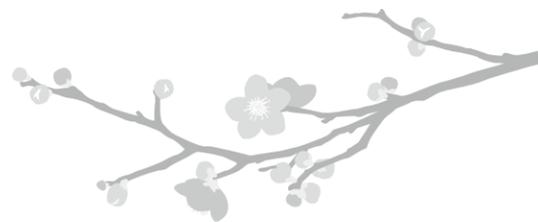
「福島の子どもたちに届けよう バナナ募金」へ引き続きご協力をお願いいたします。

2011年11月より始めたバナナ募金ですが、継続して支援して下さる方がいらっしゃいますので、2013年10月まで延長することにしました。2013年11月以降も様子を見て継続の判断をします。引き続きのご支援よろしく申し上げます。

- 福島県の保育園・幼稚園への配達状況は、ホームページでご確認いただけます(23施設、約1700人の子どもたちへ届けています)。http://www.apla.jp/bnn_bokin/log.html

APLA会員限定のメーリングリストを不定期に流しています。

まだ登録されていない方はぜひ登録してください。(info@apla.jpまでご連絡ください)。



From East Timor【東ティモールより】

循環型農業の
実地研修がスタート!

2010年から、コーヒーだけに頼らない地域づくりに向けてAPLAとともに色々な挑戦してきた2つのコーヒー生産者グループ、

Frum Caetano (フィトゥン・カイト)とGATAMIR(ガタミル)。フィリピン・ネグロスと北部ルソンの農民との交流プログラムを経て、自分たちの地域の可能性を探し出すところから始まり、それぞれのグループで魚の養殖や豚の飼育、自給作物栽培のための土づくり、女性グループの活動などを進めてきたこの2年間に一緒に振り返りました。



後列左から、マルクス(26歳)、マルセロ(22歳)、ジョアンナ(17歳)。手前のアグスト(41歳)は5児の父だが、家族や仲間の支えもあって一年間の研修に参加することに。

ずっと実践を重ねてきている」という認識をグループ全員で共有することができました。そうした現状で、今後も地域で直面していくであろう問題を解決するための知識や技術が、地域の中に必要だ、という話に発展していきました。話し合いを重ねた結果、現地

それぞれのグループから2人ずつ、合計4人が研修生として選ばれました(写真上)。年齢もこれまでの経験もそれぞれ異なる4人ですが、地域の代表として「奨学金」を受けて研修に参加するにあたり、①研修中に学んだことはすべてコミュニティに還元する、②そのために研修終了後、最低でも一年間は村にとどまり、コミュニティの人たちのために働く、③どんな小さなことでも疑問があれば恥ずか



苗床を見学。「一年後には自分たちの村にも作ろう!」とマルクス。

しがらずに聞く(＝チャンスが無駄にしない)、といった約束を

交わし、地域から送り出されました。そして2012年12月初旬、Pemaitiによるオリエンテーションを終え、研修先のマヌファヒ県トゥリスカイ郡に向かう4人に同行しました。トゥリスカイは、研修生の出身地であるエルメラ県と地形や気候が比較的似ている山地で、長年にわたりPemaitiが地元農民と一緒に持続可能な農業を実践してきている地域です。4人は、篤農家のお宅に住み込んで、農業や化学肥料に頼らない循環型農業につい

て基礎から学ぶことになりました。雨季に入った東ティモールでは、午後になるとほぼ毎日のように非常に強い雨が降るため、朝から昼までの間に外で働きながら技術を習得し、午後は室内で記録つけや現場スタッフを交えた質疑の時間、という形で進んでいく、まさに草の根の研修スタイルです。さらに「地域の将来を担うリーダーになるための総合的な学びの場にしよう!」というPemaiti代表のエゴ・レモスさんの言葉どおり、農業の知識や技術だけでなく、お世話になるお宅での家事や地域の人たちとの人間関係づくりなども含めて、すべてがトレーニング。4人がこれから一年間かけてどんなことを学び、成長していくのか、今から楽しみです。

野川未央